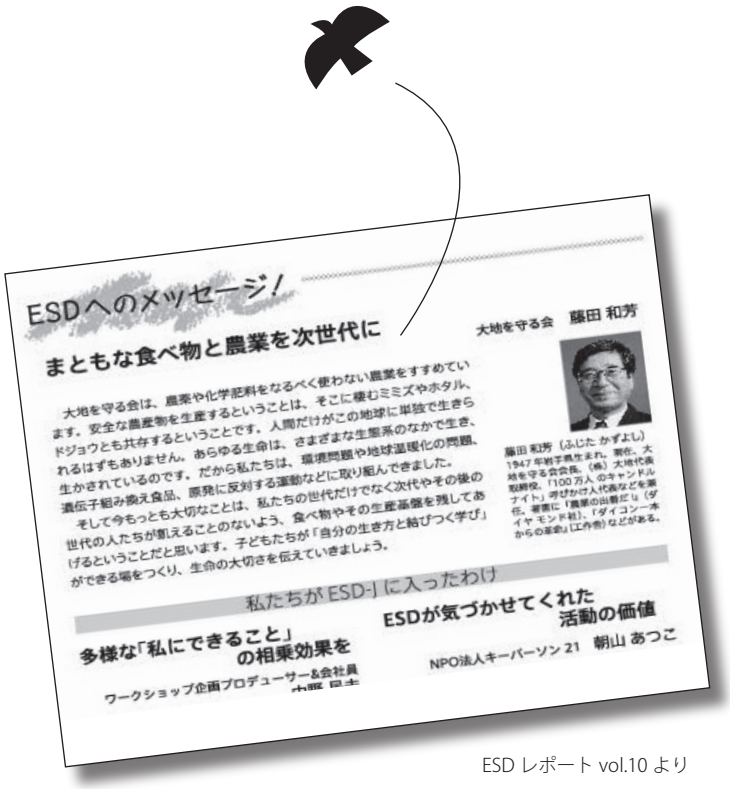
第２章

ESD へのメッセージ



ESDへのメッセージ！

まともな食べ物と農業を次世代に

大地を守る会　藤田 和芳

大地を守る会は、農薬や化学肥料をなるべく使わない農業をすすめています。安全な農産物を生産するということは、そこに棲むミミズやホタル、ドジョウとも共存するということです。人間だけがこの地球に単独で生きられるはずもありません。あらゆる生命は、さまざまな生態系のなかで生き、生かされているのです。だから私たちは、環境問題や地球温暖化の問題、遺伝子組み換え食品、原発に反対する運動などに取り組んできました。

そして今もっとも大切なことは、私たちの世代だけでなく次代やその後の世代の人たちが飢えることのないよう、食べ物やその生産基盤を残してあげるということだと思います。子どもたちが「自分の生き方と結びつく学び」ができる場をつくり、生命の大切さを伝えていきましょう。

藤田 和芳（ふじた かずよし）1947年岩手県生まれ。現在、大地を守る会会長、（株）大地代表取締役、「100万人のキャンドルナイト」呼びかけ人代表などを歴任。著書に『農業の出番だ』（ダイヤモンド社）、『ダイコン一本からの革命』（工作舎）などがある。

私たちがESD-Jに入ったわけ

多様な「私にできること」の相乗効果を

ワークショップ企画プロデューサー&会社員

ESDが気づかせてくれた活動の価値

NPO法人キーパーソン21　朝山 あつこ

ESD レポート vol.10 より

ESD-J が発足して丸 4 年。この間、さまざまな人々から、ESD という世界的な教育キャンペーンに向けての思いをお寄せいただいた。

「あなたが ESD-J に入ったわけは?」「ESD に期待することってなんですか?」。ESD レポートの創刊号（2004 年秋）から、11 号（2007 年春）までのメッセージをふりかえりつつ、ESD にかかわる“私たち”の思いを、今一度共有したい。

わたしが ESD-J に入ったわけ

2007 年

ESD を震災復興のエンパワーメントに

ESD 地域ネットワークにいがた事務局
市嶋　彰

個人会員

1948 年生まれ 59 才。新潟市在住。箸屋のオヤジ。大人になれない大人として毎日が「センス・オブ・ワンダー」である。環境、福祉、地域づくりなど幅広い活動にかかわり、完全にボランティアホリックに陥っていて抜けだせずにいる。

思い起こせば「地域ネットワークミーティング in にいがた」からもう丸 3 年が経過した。まだ ESD ということばが市民権を得ていないなか、その必要性と興味を感じながら私自身も手さぐりでの開催であったことを思いだす。

その後、“「ESD 的」に組み立てなくては”とか“これってズバリ「ESD」だよね”というようなヤリトリがごく日常的にできるようになったことが大きな成果だったと思う。

新潟では、2 年半前の中越震災の復興がこれから本格化するなか、「ESD 的」な発想が求められていくことは間違いない。私自身も「山古志」の復興支援にかかわりながら、持続可能な中山間地のモデルづくりにおいて ESD を学んできた自分の役割は少なくないと思うし、ESD-J の活動そのものが、現地の方々へのエンパワーメントにつながっていくことを期待している。

ESD レポート Vol.11（3 月 15 日発行）より

合言葉は“ええやん、すごいやん、できるやん！(略して ESD)”

ESDin 三重 代表
脇田　智恵

団体会員

県内在住の外国人のみなさんにご協力いただき、「ワールド ティ パーティ」を開催。各国のお茶とお菓子を楽しみながら、世界の現状と異文化理解を深めた。

三重県内の ESD 的活動をしている人たちを一人でも多く発掘し、地域の人たちに伝え、そして互いに学び合うための小さなグループ「ESDin 三重」を発足して 2 年。その輪は少しずつですが着実に広がりつつあります。

年 4 回発行している会報「ESD たんけん隊レポート」や、子どもから大人まで気軽に楽しめる市民参加型のイベント開催をとおして、ESD の紹介と普及に努めてきました。最近、会報の読者やイベントの参加者から、「自分もできることから ESD に取り組みたい !」という声も。2007 年の「ESDin 三重」の目標は、具体的に実践する仲間を増やすこと。ESD-J への参加をとおして、全国の多くの ESD に取り組むみなさんとのつながりを感じるとともに、三重県内の実践事例を全国にしっかり PR していきたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願いします。

ESD レポート Vol.11（3 月 15 日発行）より

多様な「私にできること」の相乗効果を

ワークショップ企画プロデューサー
& 会社員
中野　民夫

個人会員

会社勤務の傍ら、ファシリテーションの講座や、人と自然をつなぎなおすワークショップを実践。Be-Nature School や明大・立教大などの講師。著書に『ワークショップ』『ファシリテーション革命』など。

2002 年に、ESD-J の前身ともいえるヨハネスブルグサミット提言フォーラムにかかわったおかげで、サミット現地へのツアーにも参加しました。そこで、北の国も南の国も、政治も企業も NGO も、世界の課題は「持続可能な開発」であることを、はっきりと確認しました。以降、会社の仕事でも個人の仕事でも、「持続可能性」が究極のテーマだなと思っています。

また、ワークショップやファシリテーションなど、一人ひとりの経験や思いを引き出し、参加・体験・相互作用のなかで大きな学びや創造や行動に編みあげていく「参加型の場づくり」は、持続可能な社会のための「共通基礎文法」ではないかと思ってこだわっています。多様な方々が集う ESD-J は、それぞれ「自分のできること」に取り組みながら連携して大きな力にしたいですね。

ESD レポート Vol.10（1 月 15 日発行）より

ESD が気づかせてくれた活動の価値

NPO 法人キーパーソン 21 代表理事
朝山　あつこ

団体会員

3 人の子どもの母親。「子どもたちに夢と職業意識を運びたい」という願いのもと、同団体を設立。2005 年度より、経済産業省「地域自律民間活用型キャリア教育プロジェクト」事業を推進している。

誰にでも、一人にひとつ、必ずよいところがある。子どもたちが、そんな自分を発見し、自分の役割を見つけ、社会のなかで力を発揮できることを願って、当会では、将来の生き方や職業について考えるためのゲーム「ハッピーキャリアプログラム」を開発。全国各地で実施支援しています。プログラムをとおして子どもたちの目が輝く瞬間が活動を続ける力となっています。

とはいえ、子どもの成長には時間がかかり、すぐに結果のでるものではありません。ときに活動がささやか過ぎるように感じてしまうことも……。そんな折、ESD と出合いました。一人ひとりが主体的に社会参加し、よりよい未来を築くための教育である ESD は、まさに私たちの活動そのもの。改めて活動の意味に確信をもった次第です。これからも、キーパーソン 21 は ESD とともに歩んでまいります。

ESD レポート Vol.10（1 月 15 日発行）より

2006 年

自分・世界・地球の全体像をとらえる教育番組を

NHK 制作局ディレクター
窪田　栄一

個人会員

NHK 制作局学校教育番組部。東京大学工学部卒業。東京・名古屋で科学番組や若者向け番組など制作。2006 年 4 月から、おもに中学高校向けに南北問題や環境、平和などを扱う教育番組「地球データマップ」（教育 TV 木曜午前 11:30-11:50）を放送中（http://www.nhk.or.jp/datamap）。

若い人たちはテレビや雑誌など多くの情報にさらされ、学校でもいろんなことを学びます。しかしそうした断片的な知識や情報から、自分が生きる世界の全体像やすすむべき未来へのビジョンを思い描くことは困難です。私は環境問題などに関心をもちテレビ番組をつくってきましたが、個別の問題に警鐘を鳴らすだけでは人類の危機に対処できないと感じ、ESD に興味をもちました。

若い世代が、環境も社会問題も平和もつながりあったものととらえ、地球・世界の全体像と、そのなかでの自分の位置を了解できるような番組をと思い、この春から「地球データマップ」を放送しています。ESD の映像教材として、ぜひいろいろな場面で活用してもらえたらうれしいです。そして ESD-J のみなさんの活動を取材させていただいたり、番組の活用法のアイデアなどを教えていただければと思っています。

ESD レポート Vol.9（11 月 15 日発行）より

草の根の運動を、できることから

（社）日本ユネスコ協会連盟広報室長
川上　千春

団体会員

「現代の暮らしと水」マネキンをシャンプーして水の使用量を比較実験中

（社）日本ユネスコ協会連盟
http://www.unesco.jp
ずっと地球と生きる学校プロジェクト
http://esd.yomiuri.co.jp/

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから人の心の中に平和の砦を築かなければならない～」この UNESCO 憲章に感銘を受けた人々により、UNESCO 加盟をめざした戦後間もない草の根の運動が、日本ユネスコ協会連盟の礎となっています。

現在は、識字教育支援である「世界寺子屋運動」、世界遺産のみならず、身近な文化や自然を未来へ引き継ぐための「世界遺産活動」を 2 本の柱に据え、国内各地のユネスコ協会（約 300）を中心にさまざまな活動を展開しています。

これまでの活動は、まさに ESD でもあったわけですが、昨年より、読売新聞社と共催で、企業、小学校、メディア、NGO の四者をつないだ出前授業「ずっと地球と生きる学校プロジェクト」を展開しています。地球規模の課題を学び、人にも地球にも望ましい発展のあり方を考え、できることから行動しようというもの。ESD-J の活動を通じて、これまでの蓄積を生かし、企業や他団体とも連携しつつ、未来に向けて行動していきたいと願っています。

ESD レポート Vol.9（11 月 15 日発行）より

生きる力を育む　～お産・子育てからの学び

NPO 法人 自然育児友の会代表理事
内田　淳子

団体会員

国際基督教大学卒業。クレヨンハウスで雑誌編集に携わった後、海外ドキュメンタリーの制作にかかわる。二人の子どもを助産院・母乳育児で育てた経験をもとに、自然なお産や母乳育児の情報提供と同時に、母親たちの仕事の場づくりも行っている。

少子化や児童虐待など、お産・子育てについての元気のでないニュースばかりが目につきます。そんな時代ですが、当会には、自然の摂理にあったお産や母乳育児をとおして、自分自身の生きる力にあらためて気づき、その体験をほかの母親たちとシェアしたい、伝えたい――、そんな思いをもったお母さんたちが続々と入会しています。

子育ての悩み相談など、今までは母親同士の互助的な活動が中心でしたが、「赤ちゃんとの絆＝アタッチメントを育む楽しさ」「生きる力を育む知恵」など、私たちだから伝えられることを、ESD-J でも積極的に発信していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

ESD レポート Vol.8（6 月 15 日発行）より

ESD を岩手大学の旗印に

岩手大学理事・副学長
玉　真之介

団体会員

専門は農業経済学。昭和 61 年に岡山大学、平成 2 年に弘前大学、平成 10 年に岩手大学と渡り歩いて、平成 17 年から現職。小農、家族農業の持続性に関する理論的、歴史的研究を続ける。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」。こう述べた宮澤賢治は、岩手大学の前身である盛岡高等農林の卒業生です。ESD の 10 年は岩手大学に、宮澤賢治の思想がもつ世界的な意味と、この思想が岩手大学の教育に伏流水として流れ、全体に染み渡っていることを気づかせてくれました。

岩手大学はこの自覚に立って、全学共通教育のすべての科目に ESD を織り込む努力を始めようとしています。多様な教養科目を ESD でつないで「学びの銀河」として示し、そこから学生に自らの ESD の星座をつくってもらう構想を描いています。岩手大学は、大学全体で ESD に取り組みます。

ESD レポート Vol.7（3 月 15 日発行）より

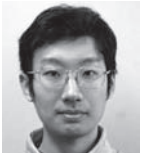
2005 年

持続可能性を合言葉に大学の内と外をつなぐ

AGS-UTSC サステナビリティ教育ワーキンググループ
玉井　暁大

団体会員

東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻修士課程を卒業。大阪府立大学理学系研究科修士号取得。大学における環境教育を研究テーマとしていた。



東京大学という大学ひとつをとっても持続可能性（サステナビリティ）の教育に興味をもつ人・研究する人は分散しており、互いのことをまったく知らないケースが多々あります。そこで、散在する関連研究を行う人や、サステナビリティ教育に興味をもつ人が多様な分野から集まり、意見・情報を交換し、議論する場になることを最大の目的として、昨年このワーキンググループが設立されました。

新たな視点や考え方を得たり生みだしたりする一つの場となると同時に、一つの点として内外のさまざまな立場の人々の動きとつながるリンクとなることをめざしています。ESD-J の活動を通じて、さらに他の主体で取り組んでいる人々との交流と学びを深め、発信を行っていければと考えています。

ESD レポート Vol.6（12 月 10 日発行）より

岡山市として入会しました

岡山地域 ESD 協議会事務局長
内藤　元久

団体会員

岡山市環境局次長。岡山地域 ESD 協議会事務局長。昭和 52 年岡山市に技術職（化学）として入庁。公害課に配属される。以来、ほぼ一貫して、公害、環境保全部門を歩む。平成 13 年 4 月から現職。

岡山市では、環境、国際、男女共同参画をはじめさまざまな市民活動、教育活動が行われています。それらを踏まえ、2002 年の環境開発サミットで開催されたユネスコ主催のサイドイベントで岡山市の市民の取組みを紹介したことを契機に、各教育機関や行政、市民団体、事業所などを交えた ESD に関する取組みを地域で考え始めました。2005 年 4 月には、それら関係者により「岡山地域 ESD 協議会」を設置し、6 月には、国連大学が提唱する地域の拠点（RCE）に認定されました。現在、環境と国際理解の活動分野を軸に、ESD についての周知、学習会や研修会の開催などを行っています。

ESD-J には、2005 年 3 月のキックオフミーティングに前市長が参加したさいに、「岡山市」として加入しました。ESD-J の池田副代表からの紹介もあり以前からおつきあいがあったのですが、今後の岡山地域における ESD の推進のため、他地域、各分野のみなさまとの情報交換が有意義と思い参加しています。岡山地域の市民はもとより全国のみなさんと持続可能な地域づくりの推進に向けて一緒に歩んでいきたいと考えていますので、今後ともよろしくお願いします。

ESD レポート Vol.5（9 月 15 日発行）より

私自身の「総合的な学習」のために

独立行政法人 国立青少年教育振興機構理事長
松下　倶子

団体会員

現在、ガールスカウトでは、最年少部門（テンダーフット 5 歳児対象）のリーダーとして活動。仕事は、全国に 14 ある国立少年自然の家が構成している法人の運営の責任を担って、法人本部のある福島県と東京を行き来して勤務している。

「一人ひとりの少女が、幸せな一生を送ることができるように」という創始者の願いのもとに始められたガールスカウト運動に参加して約 50 年。スカウトとして、指導者として日常的な具体的なさまざまな活動をするなかで、「自分に与えられた命、能力（ちから）に感謝して、ちからを磨く」「ともに生きる地球上のさまざまな人々の多様性を受け容れる」「自分にできることで、人に役立つ生き方ができる」といったことに気づかされ、学ばせていただき、そうしたことに努力してきたように思います。それが、次代の担い手である少年たちに、自然の中での体験活動を支援する少年自然の家の運営にかかわる仕事を引き受け、野外教育、環境教育、開発教育、生涯学習に関する諸活動に参加する現在につながっているのだと思います。

ESD-J の設立を知ったとき、前述のキーフレーズすべてを考える活動だと感じ、勉強しよう！ と会員になりました。仕事のなかで、ガールスカウト活動のなかで子どもたちに伝えなければならないことを、プログラムとして考えだせるように、会員の方々の多様な活動からたくさん学ばせていただきたいと願っています。

ESD レポート Vol.4（6 月 1 日発行）より

開発と環境と人権をつなぐ

(財) アジア・太平洋人権情報センター
上席研究員
前川　実

団体会員

1969 年に市民運動に参加して以来、NGO 専従者暦 30 余年。この間、子どもの権利条約批准の会（1988 年）や人権フォーラム 21（1997 年）などの結成に参加し、事務局を担当。2002 年 1 月より財団法人アジア・太平洋人権情報センター企画業務グループ総括研究員。

97 年、政府に人権擁護推進審議会が発足。人権教育や人権政策のあり方について答申をだす動きに対し、人権フォーラム 21 が結成され、私が事務局となりました。このさい、「人権教育のための国連 10 年」(95 ～ 04 年) の趣旨をフル活用し、従来ばらばらだった同和・開発・環境・平和・国際人権教育の関係者の対話を創出。市民が政策提言するうえでの刺激を大いに受けました。そこから ef（未来のための教育協議会）があり、今の ESD-J があると思っています。

2004 年、私の所属する団体が国際人権教材奨励事業 AWARD2004 を公募しました。受賞作品の 1 つ『ゴミに暮らす人びと』をみて、私は衝撃と感動を覚えました。中米や東南アジアのゴミ捨て場に暮らす人々を活写し、地球社会のあり方を問う。「人間開発報告書」を参照しつつ、環境と開発と人権を相互に結びつけて考え、行動することを呼びかけます。2005 年 1 月にこれを VHS ビデオで刊行しましたが、2005 年は、国連ミレニアム開発目標フォローアップや京都議定書発効の年です。また、ESD の 10 年とともに第 2 次先住民族のための国際 10 年の開始年であり、人権教育世界プログラムもスタート。開発・環境・平和・人権というグローバルな課題を包括する広義の「教育」を ESD で推進したいと願っています。

ESD レポート Vol.3（3 月 1 日発行）より

2004 年

保護者にぜひ知ってほしい

Act for the Earth 代表
相星　素子

個人会員

東京都在住。小さな市民団体「Act for the Earth」の代表。演劇とワークショップをとおして、環境問題を若い世代に気づいてもらえたら。小学校と高校の PTA 役員（2004 年当時）。ソウルに 2 年住んでいたためか、韓流ブームにはまっている。

長女が年長のときから、集団生活や友達づきあいが苦手なため、小学生時代中、私が学校に行く必要が多くなりました。そのころのおかげで、子育てのあり方、先生と保護者の対話、保護者同士のおつきあい、学校での勉強などについて、いろいろ考えざるを得なくなりました。長男は友達を始終家に呼ぶので、友達とのかかわりあいを目の当たりにします。自分の子をとおして足元をみつめながら、社会での青少年の事件、親子の事件、不登校生、引きこもりなどの現象が増えている原因がなんなのかしら、と考えます。

ESD-J の立ちあげを知ったとき、世界的にもこんな流れがあるんだあ、とうれしくなりました。さまざまな問題は、「つながり」と「活気」が根っこで欠けていることから起きているように思え、そこを大事にする教育がなによりも大切だと思っていました。ESD-J のめざす方向は、このことを大事にするものだと思います。そして、このような動きをなによりも、子どもたちの教育に毎日向き合っている保護者が知って理解したら、大きな力になるなあと思っています。

ESD レポート Vol.2（12 月 1 日発行）より

胸を張って次世代にバトンタッチするために

富山工業高等専門学校技術専門職員
伊藤　通子

個人会員

富山県在住。開発教育のグループ「とやま国際理解教育研究会」事務局長。県内の技術者や研究者らと立ち上げたエコテクノロジー研究会では、科学技術の側面から環境教育を推進する。里山の古い農家を買い移り住んでいる。

いつ、どこで、初めて ESD という言葉を知ったのかはよく覚えていません。でも、よくわからないまま、なにか惹きつけられ「ESD ってなんだろう？」と考えていくなかで、今まで富山で仲間たちとともに考えたり実践してきたこと、開発教育や環境教育の市民活動、自分がめざす生き方、そのものじゃないかと思えるようになってきました。そして、「国連 ESD の 10 年」を追い風に、同じ思いの人たちとつながってみたいと思ったのです。

「なんだか生きにくいなぁ」と思う日々。長女だから？　田舎だから？　家庭をもち子どもを育てるなか、ますます感じる居心地の悪さ。毎日のように紛争、貧困、食糧などの問題に苦しむ人々のニュースが。けっして私たちと無関係でなく、それらをともに克服する努力をしなければ子どもたちに胸を張って時代をバトンタッチできません。小さなことでも少しずつ地域で続けます、世界とつながっていることを感じながら。

ESD レポート Vol.1（9 月 1 日発行）より

ESD に期待します！

2007 年

ESD の本質

国連がなぜ ESD の 10 年をスタートしたのか。地球上で人類が持続的に存在する条件はなにか、という広い視点をもった教育が必須だからである。そのため、まずはグローバルレベルの持続可能性から考え始める必要がある。必須項目としては、(1) 気候変動 / 温暖化、(2) 食糧生産と水限界、(3) 化石燃料限界、(4) 貧困と世界人口、(5) 持続可能な生産と消費、の 5 項目ぐらいだろうか。日本という国は、食糧・エネルギー・資源を世界に依存し、製品の市場も世界である。グローバルな持続可能性が実現したとき、はじめて持続可能になる国である。これを共通認識とし、世界をまず見て、それから日本の持続可能性と未来を論じたい。ESD-J のリーダーシップに期待したい。

ESD レポート Vol.11（3 月 15 日発行）より

国際連合大学 副学長
安井　至

東京大学工学部卒業、工学博士。東京大学生産技術研究所教授、国際産学共同研究センター長、などを歴任。03 年 12 月から、国際連合大学で環境と SD 担当の副学長。専門：環境科学全般、LCA、総合環境評価。

2006 年

まともな食べ物と農業を次世代に

大地を守る会は、農薬や化学肥料をなるべく使わない農業をすすめています。安全な農産物を生産するということは、そこに棲むミミズやホタル、ドジョウとも共存するということです。人間だけがこの地球に単独で生きられるはずもありません。あらゆる生命は、さまざまな生態系のなかで生き、生かされているのです。だから私たちは、環境問題や地球温暖化の問題、遺伝子組み換え食品、原発に反対する運動などに取り組んできました。

そして今もっとも大切なことは、私たちの世代だけでなく次代やその後の世代の人たちが飢えることのないよう、食べ物やその生産基盤を残してあげるということだと思います。子どもたちが「自分の生き方と結びつく学び」ができる場をつくり、生命の大切さを伝えていきましょう。

ESD レポート Vol.10（1 月 15 日発行）より

大地を守る会会長
藤田　和芳

1947 年岩手県生まれ。現在、大地を守る会会長、（株）大地代表取締役、「100 万人 のキャンドルナイト」呼びかけ人代表などを兼任。著書に『農業の出番だ !』（ダイヤモンド社）、『ダイコン一本からの革命』（工作舎）などがある。

地域からの教育改革をすすめていきましょう！

21 世紀のキーワードは「持続可能な社会づくり」です。グローカルな視点から具体的地域課題を解決する力をつけることが必要です。次代を担う子どもたちに求められるのは、学校で教わる形式的な知識の習得ではなく、新しい価値を創造するための知識を体得することです。そこでは地域での「体験」が重視されます。「体験」こそ、新たな知識を生みだす源泉です。これを私たちは「地域教育」と呼んでいます。地域住民、企業、NPO、行政が一体となって、子どもたちに新しい価値を創造する場（地域教育プラットフォーム）づくりに、私たちは取り組み始めたところです。ESD は、地域からの教育改革の基本に据えられるべき理念であると私は考えています。

ESD レポート Vol.9（11 月 15 日発行）より

東京都教育庁社会教育主事
梶野　光信

1967 年 1 月 21 日生まれ。東京都教育庁生涯学習スポーツ部計画課社会教育主事。行政の施策・制度・予算が地域コミュニティレベルにおいて最も有効に作用するための社会的受け皿（社会的ネットワーク）づくりをどのようにすすめたらよいか、日々 " 考え中 " です。

学力観を問いなおす ― ESD で学校が変わるか ―

今、子どもたちの学力低下という問題を前に、これまでの「学校」という存在が改めて問われている。学力をつけられない学校とは、一体なんのための存在なのか。この問いはもう一つの問いを私たちに投げかける。「学力」とはなにか、その中身とは。計算が速いことなのか、漢字をたくさん知っていることなのか、お行儀良く教室で座っていられることなのか……。「学校」というシステムが、文部科学省の全面的な庇護（設置認可・指導要領・検定教科書・教員免許制）のもとで、変化を問われることなく存在しつくり続けてきた、学力観に対する問いなおしと、つくりなおしが始まっている。ESD はどんな働きかけをするのか。自分もともに動いていく存在として、大きな期待をしている。

ESD レポート Vol.8（6 月 15 日発行）より

日能研代表
高木　幹夫

1954 年 3 月 21 日生まれ。「日能研」代表。塾の立場と、NPO 法人「体験学習研究会」の立場から、子どもの学びにかかわり、「体験学習」「野外学習」の改善・活性化提案に力を入れている。2005 年 10 月より親業訓練協会会長に就任。

子どもたちの集めた割り箸で社会貢献

王子製紙グループは、文化を支え教育をサポートするためにも、環境に配慮しながら紙需要に応えることが社会的責任であると考えます。

当社の社会貢献活動の一つに割り箸回収活動があります。使用済み割り箸を回収し、紙の原料として再利用するのです。1992 年に米子工場の従業員が環境教育の一環として地域の子どもたちと始めた活動で、現在は全国 9 工場に広まり地元の学校も工場見学に訪れます。2004 年度は 491t 集まり、重量に比例して 50 万円を ESD-J に寄付しました。全国の子どもたちが集めた割り箸が、環境教育をはじめとする持続可能な社会づくりに向けた教育の充実に役立っています。

今後も当社は本業を活かした社会活動を推進するとともに、ESD の発展に期待します！

ESD レポート Vol.7（3 月 15 日発行）より

王子製紙株式会社
環境経営推進室
渡邉　宏美

2004 年に王子製紙（株）に入社。日南工場勤務を経て、2005 年 6 月に新設の部署である環境経営推進室に配属となりました。当社の環境活動について積極的に情報発信していきたいと思っています。

2005 年

木を植えるより、木を植える“人”を育てる

持続可能な環境、平和で安定した社会の実現には、「人」がいかに英知を結集し、行動するかが重要です。「人」は複雑多様な可能性をもつことから、当財団では「木を植えるより、木を植える“人”を育てる」をモットーに、「CSO ラーニング制度」を実施しています。

この制度では、大学生が環境 NPO で長期インターンをし、環境問題、NPO の社会的意義、市民社会のあり方を考えることをめざしています。機会や場さえあれば、人間の力はいくらでも引きだされることを実感しています。

今後、持続可能な社会づくりに向け、市民一人ひとりの参画、そして、NPO の役割はますます重要になってまいります。ESD-J の活動に期待しております。

※ CSO（Civil Society Organization: 市民社会組織）ラーニング制度については、下記 URL をご参照ください。
http://www.sjef.org/internship/

ESD レポート Vol.6（12 月 10 日発行）より

損保ジャパン環境財団事務局長
富沢　泰夫

1953 年東京生まれ。78 年東京大学法学部卒。同年、安田火災に入社。99 年同社地球環境部課長。02 年損保ジャパン環境財団事務局長（出向）。03 年損保ジャパン記念財団事務局長を兼務し現在に至る。

「企業は社会の公器」を経営の根幹に

とどまるところを知らない経済のグローバル化により、社会課題・環境問題はボーダーレス化・グローバル化の果てに、その解決には地球規模での取組みが求められています。「持続可能性の実現」には企業の、とくにグローバル企業の果たす役割が重要であると認識しています。

「企業は社会の公器」。創業者が企業の社会性について言及した言葉で、弊社の経営理念の根幹を成しています。松下電器グループでは「地球環境との共存」「社会福祉・共生社会」など幅広く活動して参りましたが、そのなかでもとくに「教育・人材育成」に力点を置いて NPO 支援プログラム・社員啓発プログラムなどの社会貢献活動を展開しております。

さまざまな社会的課題の解決のために教育の果たす役割はますます重要になってきており、2005 年から「持続可能な開発のための教育の 10 年」の取組みが始まったことはたいへん有意義であると認識しています。「Think Globally, Act Locally」。言い古された言葉かもしれませんが、この言葉の重要性は普遍です。持続可能な開発の実現に向けて、ESD-J の活躍に期待すると同時に、賛助会員として弊社も特色のある活動を地道に、着実に取り組んでいく所存です。

ESD レポート Vol.5（9 月 15 日発行）より

松下電器産業株式会社
社会文化グループ
小西　ゆかり

1982 年に松下電器産業（株）に入社。入社以来、法務業務を担当してきたが、2005 年 4 月に社会文化グループ グループマネジャーに就任。座右の銘は、「積極的すぎることはない」。松下の社会貢献活動の顔となるべく、必死で勉強中です。

自分の尊厳や権利を守るために

わたしは昔話を勉強してきたので、長い物語を暗記している、文字の読めない語り部さんたちを尊敬してきました。それで、教育のことはあまり考えたことがなかったのですが、あるきっかけで目を開かされました。

それは、『世界がもし 100 人の村だったら』の出版です。この絵本のテクストは、1 通のチェーンメールを書き直したものですが、そのチェーンメールの原案者であるアメリカの環境学者、ドネラ・メドウズさんのエッセイ、「貧しい人びとが幸せになる 5 つの条件」に書かれた条件の 1 つが、「基礎教育を受けられること」でした。わたしはこのことから、さまざまな暴力が大手を振るう現代、自分の尊厳や権利を守るには読み書きの力が欠かせない、ということを知ったのです。

そうした途上国での教育の普及の努力のいっぽうで、わたしたちにはなにができるか、しなければならないかを問い続け、ささやかでもいい、おこないを積み重ねていくきっかけに、ESD がなることを、期待しています。

ESD レポート Vol.4（6 月 1 日発行）より

ドイツ文学翻訳家・ESD-J 顧問
池田　香代子

1948 年東京生まれ。翻訳家、口承文芸研究家。主な訳書に『ソフィーの世界』『夜と霧』など。『世界がもし 100 人の村だったら』の印税で「100 人村基金」をたちあげた。世界平和アピール七人委員会メンバー。

求められる教育の実現に向けて

教育は未来です。教育は希望です。教育はロマンでありときめきです。それを欠いた教育は活力と輝きを失います。今、国連持続可能な開発のための教育（ESD）の 10 年が始まります。それは、未来に希望を抱き、ロマンとときめきを感じながら、持続可能な社会を実現するためのさまざまな課題に、主体的・創造的に取り組むことのできる子どもたちを育てることを意味します。

その教育実践には、時代を超えて変わらない価値のあるもの（不易）を大切にする、時代の変化とともに変えていく必要があるもの（流行）を大切にする、という視点に立ち、すべての大人が、もっている英知をだし合っていく必要があります。そうした支援を得ながら、子どもたちは未来に希望を抱き、活き活きと学び育っていくことでしょう。ESD は、これからの社会に求められる資質・能力を育成するとともに、真に豊かな社会を実現する教育です。ESD が教育活性化の起爆剤になることを願ってやみません。

ESD レポート Vol.3（3 月 1 日発行）より

前文部科学省視学官
嶋野　道弘

文教大学教授。前文部科学省初等中等教育局主任視学官。埼玉県熊谷市生まれ。埼玉県公立小学校教員、埼玉県教育局主任指導主事などを歴任。主な著書に「生活科の子供論」（明治図書）、「『総合的な学習の時間』―実践へのアプローチ―」（全国教育新聞社）など。

2004 年

環境関係の人々は「開発」をどう考える？

ESD が始まってから、環境教育の関係者と緊密に交流するようになり、うれしく思っています。1992 年の地球サミット以降、「環境教育と開発教育とは手を携えねばならない」と言われてはいたのですが、具体的な行動は乏しかったのです。ESD を迎えて、いよいよお互いに議論し交流し協力し合えるようになりました。

開発教育という名称も「開発」を冠しているため、これまで通りがよくありませんでした。今では、あなたが意味する「開発」とはなんですか？ と聞かれたときに、「はい、持続可能な開発です」と答えるとなんとなく受け入れられるようになりました。とはいうものの、環境関係の方々は今でも開発という言葉に抵抗を感じられる方も多いのではないでしょうか。しかし ESD を推進するためには「開発とはなにか？」は避けて通れません。従来の経済開発に対置する形でさまざまなオールタナティブな開発が論じられました。「内発的発展」「社会開発・人間開発」、そして極めつけは「持続可能な開発」——それらの「開発」について環境教育の方々はどのようなスタンスをとるのでしょうか。これからの議論が大いに楽しみです。

ESD レポート Vol.2（12 月 1 日発行）より

開発教育協会代表理事
田中　治彦

郵便友の会、YMCA、南北ネットワーク岡山などを経て（特活）開発教育協会に。現在代表理事。立教大学では社会教育と国際教育を教える。今後、ワークショップをとおしたタイや韓国との ESD 交流に意欲的。

ESD に通じるスカウト運動の理念

ESD-J に新たにメンバーとして参画することになりました牛山です。私の所属団体は、NPO 法人自然体験活動推進協議会（CONE）と（財）ボーイスカウト日本連盟です。

CONE は、各種の自然体験を通じて自然を大切にすること、自然の教育的素養を体得したりすることで「自然に帰る、自然とあそぶ」などの資質を共有できるように、指導者の登録システムを平準化していこうという、国民的な運動体といえます。

スカウト運動では、かねてより「創始者ベーテン・パウエルは、当初から自然のすばらしさを観察し、理解し、保護することを強調してきました。そしてこのことは今でも世界のスカウト運動で脈々と受け継がれています」として、「スカウト環境行動スローガン」を日本連盟では定めています。このように、今後の ESD-J の国民的な運動の取組みに対して、両団体の理念と共有できることから、今後、積極的に取り組んでいきたいと考えております。

ESD レポート Vol.1（9 月 1 日発行）より

日本ボーイスカウト連盟
リーダートレーナー
牛山　佳久

1948 年東京都生まれ。少年時代からボーイスカウトに加入。指導者としては、主として指導者養成分野に取り組み、現在中央教育本部・中央審議会議員。CONE では、設立以前から関与、現在副代表理事。ESD-J の副代表理事に 2004 年 7 月から 2006 年 6 月まで就任。